

首夏二首

布士 廼舍

咲くと見し花はわとなく春暮れて

繁る青葉は夢かと思ふ

花散りぬ青葉繁りぬ今更に

世の常なさの風ぞ身にしむ

常夏

同人

常夏とさくからにこそ物樂けれ

花の色香は飽かすやはある

夢に子規を聞く

同人

一聲はたうたゝねの夢にして

はしむなからに月かたふさぬ

藤衣

鶯 水

なき母君の植はたまひし

花を見てよめる

兄

おほしてし花見るたびにいとしく

なき母君のしたはしきかな

おなし君の植え玉ひし藤

の花を見てよめる

妹

おほしつる君しまさねは中々に

わはれをそふる藤波の花

母君のうせ玉ひけるかり

古里をたち都へのほると

てよめる

兄

いくたびかためしはあれと故里を

わけて今霄のさりかたきかな

兄君の今年大學を卒業す

るといふに母君のうせ玉

ひければよめる

妹

うくひすの初音もまたでいたつらに

ちりて甲斐なき宿の梅か香

旅

布士廻舎

隙行く駒にうち乗りて

こゝろの燈火辿りつゝ

繁り合ひたる文の道

思へば隙なき旅路かな

葉ぎくくら

つねを

いとしや姉の君に、別れしこと、

思ひいでゝは、折々哀しめる人に

めぐし子おきて

母おきて

はらから棄てゝ

人知らぬ

遠き黄泉に

旅ねして

かへらぬ人の

いとほしや

庭の葉ぎくくら

ひと枝を

きみが手向けの  
こけむすかげの  
いかにあはれと  
まごころは  
其の人の  
おぼすらむ

